

第1回「岩崎彌太郎伝」

～安芸の地下浪人から「東洋の海上王」へ～

1. 彌太郎誕生

岩崎彌太郎（図1）は、天保5年12月11日（1835年1月9日）、土佐の井ノ口村（現在の高知県安芸市井ノ口）の地下浪人岩崎彌次郎・美和夫妻（図2・3）の長男に生まれました。



図1 岩崎彌太郎



図2 父・岩崎彌次郎

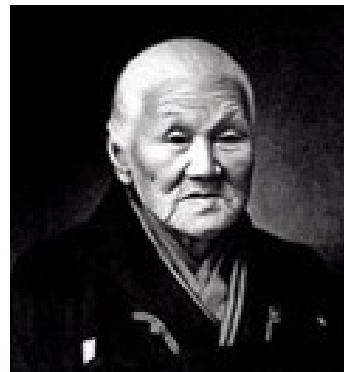


図3 母・岩崎美和

生家（図4）は、寛政7年（1795）頃に彌太郎の曾祖父、彌次右衛門が上一之宮から移築したもので、茅葺き寄棟造りの平屋でした。屋敷内面積は約1200坪を測り、式台のついた玄関を入ると、奥に九畳の居間と八畳の表座敷、裏手に控えの間があります。また、玄関脇の入口から奥へと広い土間があり、裏手には蔵があります。西蔵は明治30年頃に建てられた米蔵で、東蔵は明治19年頃に建てられ、道具蔵として使われていました。生家の表座敷の南にある庭石は、少年彌太郎が「天下雄飛」の夢を託して、日本列島を模して作ったと言われています。



図4-1 昭和30年代後半に撮影された生家



図4-2 現在の生家

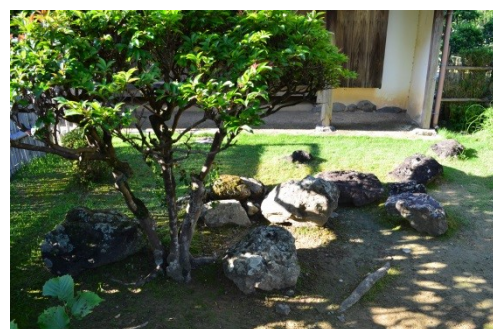


図4-3 彌太郎の組んだ庭石



図4-4 蔵

岩崎家は甲斐源氏・武田氏の末裔と伝えられ、岩崎姓は鎌倉時代、武田七郎信隆が甲斐国岩崎村で名乗ったと伝えられています。岩崎家の家紋「三階菱（図5）」は「武田菱（図6）」に由来すると言われ、その後、土佐に移り住んで長宗我部氏に仕えたとされます。しかし、関ヶ原の戦いで西軍についた長宗我部氏は廃され、慶長5年に遠江の掛川から山内一豊が移ってきたため、山野に隠れ農耕で生活を立てる身となりました。

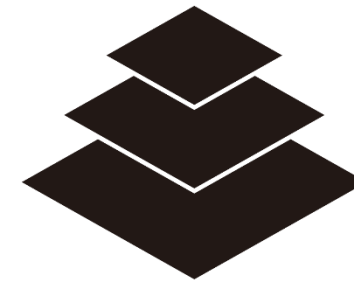


図5 岩崎家の家紋「三階菱」

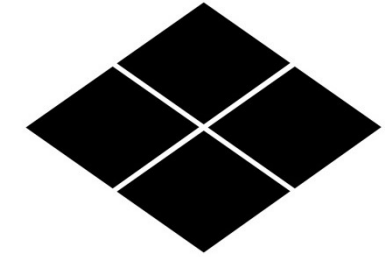


図6 武田氏の家紋「武田菱」

江戸中期に至って、岩崎氏は山内氏に郷土に取り立てられますが、平常は農耕に従事し、戦のある時には藩兵として徴用を受けました。また、郷土職は生活に困った者が百姓・町人に譲渡することもあったようです。岩崎家の場合、家伝によると元禄の頃の岩崎彌兵衛を初代として数え彌太郎は9代目となりますが、6代目、祖父、彌次右衛門の時に生活に困窮し、郷土株を売って地下浪人に没落したとされています。このことから父・彌次郎は地下浪人の身分でしたが、永らく郷土であったことから、苗字帯刀は許されていたのです。

一方、母・美和は、安芸の浦西浜の町医者小野慶蔵の次女で、長兄・次兄は共に医者になり、姉は儒学者に嫁ぐなど、大変なインテリ一家の出でした。

2. 幼少期

彌太郎は幼少の頃から気性が激しく、負けず嫌いの腕白であったと言われています。しかし、8歳の頃から儒者小牧米山の塾に通い、13歳の時、高知城下に出て儒者岡本寧浦（ねいほ）の家に寄宿して漢学を学びます。早くから詩才、文才に優れ、藩主山内豊熙（とよてる・図7）から表彰されたこともありました。地下浪人の息子という立場では立身出世への道は極めて厳しく、ただ一つ、突破口があるとすれば、ひたすら勉学に励んで抜擢をされることのみでした。

彌太郎は幼い頃から聡明さを発揮していたわけですが、それでいて品行方正な優等生ではなく、「悪ガキ」として郡一帯に知られていました。小さな体に宿る大きなエネルギーを持て余していたのかも知れません。



図7 山内豊熙

3. 彌太郎江戸に旅立つ

安政元年（1854）。彌太郎は19歳となり、土佐藩士・奥宮慥斎（おくみやぞうさい）の従者として江戸に同行することを許されます。この時、自宅の裏の妙見山の頂（図8）に鎮座する星神社（図9）の扉に「吾今回江都に遊学し後日英明を天下に轟かさざれば再び